（２）　ハード対策とソフト対策

防災対策には、災害の対象物を守ることや大きな被害に拡大しないようにということで、いわゆるハード対策を行います。このハード対策は民間や個人が行うものもありますが圧倒的に税の負担で行われるものが多いと思います。いわゆるハード対策は公助とも言える住民サービスとしての実施です。一方、ソフト対策といって、情報提供や避難にかかわるツールというものがあって、もちろんさまざまな分野の人がかかわりますが、主体は住民が適切な受け手にならなければ意味をなさないということから、自助的な要素が大きいといえます。

これまでも、防災対策はさまざま行われてきていますし、それを支援する活動も意欲的になされていると思います。しかし、ハード対策については、投資も大きく時間を要することがあって、即効的なものにはなっていません。そして、ハード対策には維持管理というものが必須になりますし、そのものも劣化するものです。言い方は適当ではないかもしれませんが、ハード対策は住民にとっては大事な安定剤のようなもので、逆に災害に対しての関心をなくしてしまいます。かつては、地すべり対策や砂防ダムといった土砂災害防止工事が完成するとその集落が管理を受け持っていましたので、ある程度の機能維持も出来ていましたが、人口減少や高齢化という状況ではその余裕もありません。これまでの延長上での考え方では投資効果的問題があるように感じています。このハード対策は絶対的な対応であるということを見直して、あくまでも災害への抑制である、極端にいえば避難する時間稼ぎであるというぐらいに考えても良いように思います。それには、現状を評価できるような情報を公開し、住民に伝達していくことが必要だと思います。あれば安心につながりますが、完全に安全ではないし、モノは未来永劫安定でないということを知って欲しいと思います。

一方、ソフト対策といわれるものは、ハード対策をベースに住民が主体的な行動を起せるような仕組みづくりであると思います。そのためには、質の高い情報と確実な伝達並びに行動を起せるような基盤の整備が必要となります。先ずは地域知を醸成することや災害のメカニズム、発生後の対応などあらゆる機会にあらゆる世代が会得すべき教養を向上させるプログラムが必要となります。

プログラムというと大げさに聞こえますが、自然災害は決して独立した事象ではなく、学校教育で言えばあらゆる教科に取り組むことができるものであり、地域、職場でも危機管理ということは極めて重要になっています。防災にはさまざまな切り口がありますので、基礎的な備えは、それぞれの意識次第ということになります。見えな

い敵、いつ襲ってくるかわからない敵にどう備えるのかということです。となれば、災害には関心を持ち、前ぶれに敏感になって先を見て避難するということに尽きると思います。まるで、身を守る武器であるウサギの耳のような感覚を持つことが必要で、それを支えるのがハード対策という位置づけになるような気がします。